

台東鳥瞰

TAITOCHOKAN

vol.
06
2021 SPRING

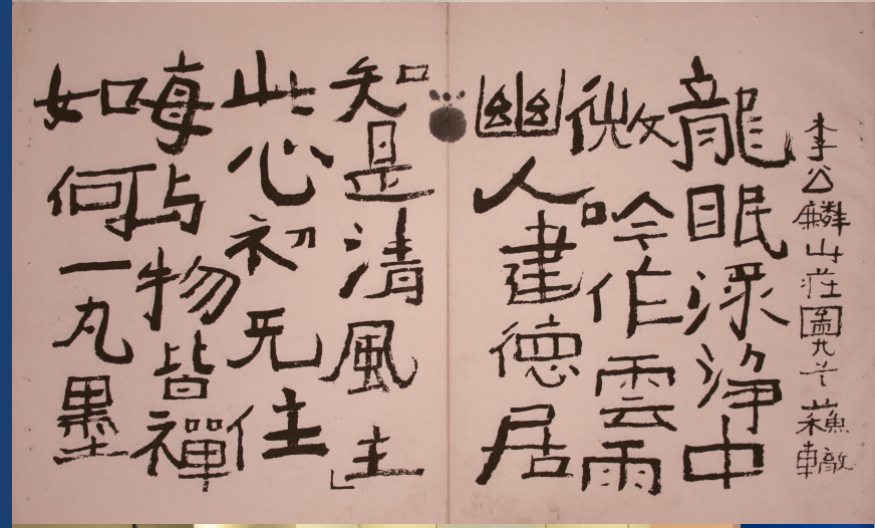
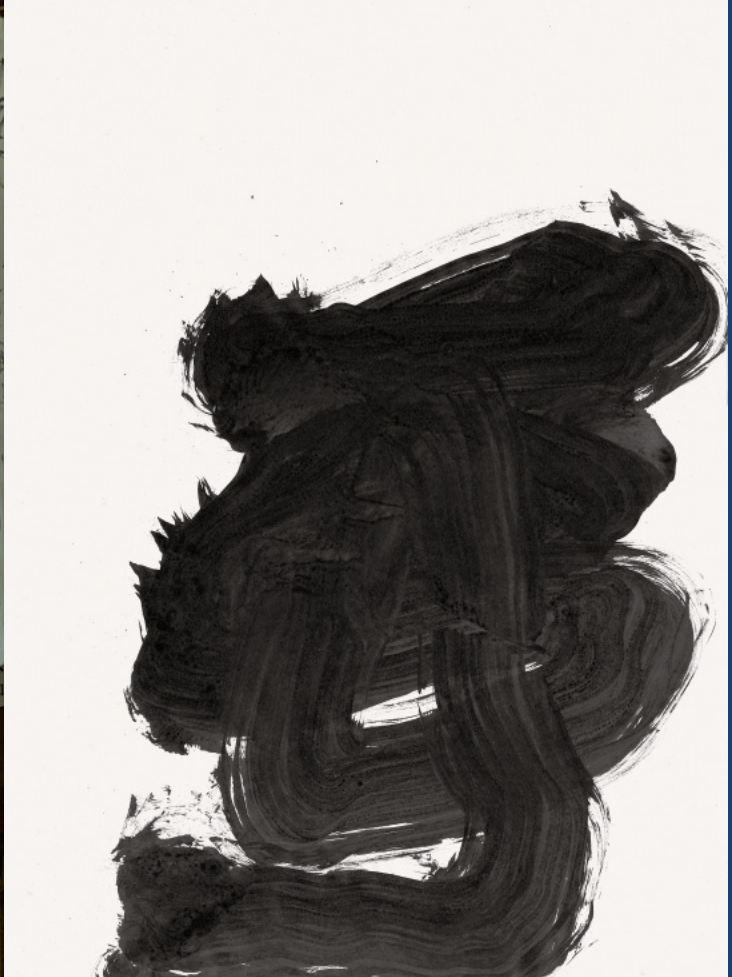
心惹かれる文字

特集 豊かな表現と歴史を再発見

・「書」のルーツと中村不折 ・令和の江戸文字を知る ・藝大×文字TOPIC
・現代書の魅力 ・監修者インタビュー ・台東タイポさんぽ

心惹かれる文字

特集 豊かな表現と歴史を再発見



日本語は、漢字、ひらがな、カタカナといった複数の文字が組み合わさってできている。その形、並べられた文字の間隔や全体のバランス、ときには書く道具など様々な要素で私たちが受け取る印象は大きく変わる。これら文字による豊かな表現は、時代とともに移ろいながら、現代においても色褪せずに残っている。

約3000年の文字の変遷をたどることができる書道博物館、いまもお大衆芸能を支えている江戸文字など、文字の魅力があふれる台東区を鳥瞰することで、文字の豊かな表現と歴史を再発見しよう。

左上から時計まわりに、寛永寺根本中堂の扁額、浅草にある鯨料理店の提灯、新城大地郎さんの書き下ろし作品《手》、江戸手描提灯の制作の様子、大谷陽一郎さんの漢字をモチーフにした作品《計に景》、書道博物館の看板、金澤翔子さんが揮毫した《飛翔》、中村不折の代表作《龍眠帖》、浅草演芸ホールの寄席文字

「書」のルーツと中村不折

明治から昭和にわたり、洋画界と書道界の両分野において活躍した人物、中村不折。彼は熱心な「書」の研究者であり、コレクターでもありました。彼が半生をかけ収集した2万点近い「書」のコレクションは書道史においても重要なもののばかり。書道博物館で、先人たちの書いた文字を見ながら「書」のルーツをたどっていきましょう！

圧巻！不折コレクションから「漢字」の成り立ちを学ぼう

紀元前
1300年頃～

文字そのものが
権威の象徴だった時代

西暦
180年頃～

「隷書」から「楷書」へ！
約400年かけて文字が進化

西暦
600年頃～

より自由に、
文字で思いを表現！

ターニングポイントは「楷書」の完成！

書道博物館では「書」のルーツである漢字の成り立ちを実物資料を見ながら学ぶことができます！紀元前から600年代中頃までが、試行錯誤して文字の美しさを追求していく「書体の歴史」といえます。



書道博物館 主任研究員の
中村信宏さん

現存する最古の文字資料 甲骨文

中国最古の王朝といわれる殷時代の後期の遺跡から出土した。亀の甲羅や牛の骨に文字を刻み、天気や、災いの有無など、王が吉兆を占うために用いた。



《第1期牛肩甲骨》

甲骨文、金文などの古代文字を総称して「篆書」と呼ぶ。格式と威厳を持ち合わせた権威のある書体。

権威の象徴としての文字 金文

神に捧げものをするための神聖な器・青銅器に見られる文字を「金文」と呼ぶ。青銅器をつくれること、扱えることが権威の象徴でもあった。



青銅器《小克鼎》

書きやすさを求めて誕生 隷書

漢字がより日常に浸透し、「隷書」では不便が生じるようになり、より楽に速く文字を書くことを目指して誕生した。画数と曲線が少なく横線が長いのがポイント。



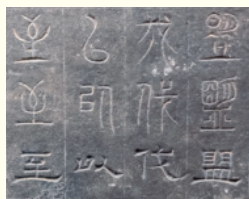
《熹平石經殘石（公羊傳）》



印刷技術も通信技術もまだなかった時代、石碑に刻まれる文字がその時代の正式書体となった。《三体石經殘石（第三石）》

さらに隷書を簡略化 草書・行書

漢時代になり、紙が開発されたことでより筆の勢いを活かした書体が発達。速書きできるよう「隷書」を簡略化した文字が「草書」。貴族たちの手紙にも好んで使われた私的な書体であった。「隷書」を縦長にして草書よりも書き崩さない事務的な文書にも使用された書体が「行書」。



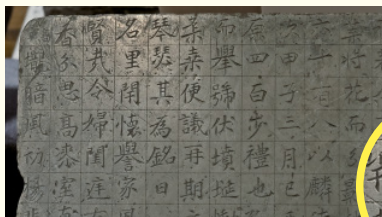
文字の進化の過程でつくられた3つの書体が刻まれた石碑。1字につき、古文・篆書・隷書の3書体が刻まれた石碑もあった。《三体石經殘石（第五石）》

「書」に気持ちを乗せていく時代の到来！

現代の私たちも使う「楷書」の原型がついに完成！「楷書」誕生以降、「書」に気持ちを乗せていくことが尊ばれる時代を迎え、文字を使った、より自由な表現が活発になっていく。

美しさが頂点を極める！ 楷書

唐時代に入り完成した「楷書」は、美しく定型化され公文書などにも使用される正式な書体となった。1400年以上たった現代までも変わらず受け継がれる完璧な形。



《王才及夫人毛氏墓誌》

書道博物館創設者・中村不折（1866-1943）



※中村不折の年齢は数え年で表記

はどんな人？

少年時代

おもちゃよりも浮世絵が好き！

幕末に生まれた不折。本名は鉦太郎。絵を描くのが好きで、将来の夢は画家が数学者。10代で熱病にかかり、ほとんどの聴力を失い、数学は断念。



幼い頃の宝物だった歌川広重《江戸名所四十八景》

洋画家

フランスで西洋画を学び、新聞挿絵画家としても活躍！

29歳で正岡子規と出会い、新聞『小日本』の挿絵を担当。コミカルな画風が好評となる。子規を通して森鷗外、夏目漱石など明治の文士とも知り合い、彼らの本の挿絵なども手がける。36歳から4年間フランスに留学し、西洋画を学ぶ。



西洋画の技術と「書」で得た知識の融合から生まれる不折ならではの油彩画《猗器の誠》（1941年）



不折が手がけた夏目漱石『吾輩は猫である』の挿絵

コレクター

収集したコレクションで博物館を創設！

30歳で正岡子規とともに日清戦争の従軍記者として清国に渡った際、古い石碑や建築に刺激を受け拓本などを持ち帰り、「書」に興味を持つようになった。以後生涯にわたり「書」に関する資料の収集を続けた。

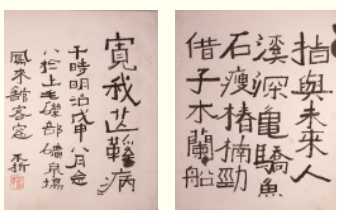
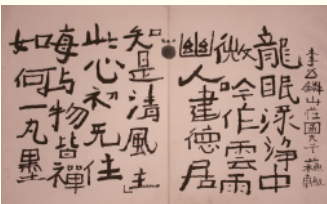


不折がもっとも気に入っていた「隷書」から「楷書」への移行期の文字《呂憲墓表》

書家

43歳、「不折流」文字で書家デビュー！

洋画家として多忙を極めた不折は体調を崩し、温泉へ湯治に行く。そこで気分転換に書いた《龍眠帖》が書道界に一大センセーションを巻き起こす大ヒットとなり、書家・不折が誕生。一風変わった書風は「不折流」と呼ばれ、明治の文豪たちに大きな影響を与える。



不折の《龍眠帖》（1908年）



インドカリーで有名な「新宿中村屋」の看板は不折が手がけた

ワークショップレポート！「不折流」の文字を書いてみよう

書道博物館で不定期で開催している実践ワークショップに挑戦！学芸員の中村さんに「不折流」を教えていただきました。

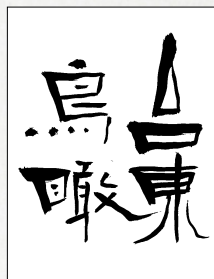


まずはお手本を作成

篆書風、隷書風、様々な「不折流」を書き分ける学芸員・中村さん。「ポイント」は、外せるだけ外すこと。中心とかは忘れて全体のバランス感覚を楽しんでみましょう！

中村さん作の「不折流「台東鳥瞰」！

お手本を参考に「不折流」に挑戦中。「筆は立てたり、寝かせたりして、筆圧の変化を楽しみましょう」という中村さんの言葉通りに、線の変化を楽しみながら練習。



様々な線の変化が味わい深い「不折流」。みなさんもぜひチャレンジしてみてください！

COLUMN

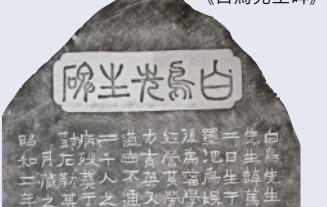
不折流を読み解く

文・永原康史

中村不折は、従軍記者として渡った大陸で石碑や拓本の文字に惹かれ、書の研究を始めた。そのためか、不折の書からは筆で書いた文字とは違う、彫刻した文字の佇まいが強く感じられる。最初の書作品《龍眠帖》の文字も、線そのものは拓本のように静かだ。その代わり、文字の形は崩れ、跳ねている。その止まった線と動きのあ

る形が、意匠的と評される所以だろう。のちの書作品《楷書千字文》などは、形も静かになり石に彫った文字にさらに近づく。不折は石碑の作品もいくつか残している。石碑文字から生まれた筆文字を職人が石に彫り、そしてそれをまた拓本に採ることで新たな文字が生まれる。不折の文字は、技法を超えて描かれている。

中村不折の
《白鳥先生碑》



台東区に受け継がれる 江戸のデザイン 令和の江戸文字を知る

江戸時代に誕生し、町人文化とともに独自の発展を遂げた力強く情緒豊かな江戸文字。いまま台東区では、様々な場所で江戸文字を見つけることができます。そんな伝統の江戸文字を描く職人のひとりである江戸手描提灯職人、山崎屋源七提灯店の8代目・山田記央さんを訪ねました。令和の時代にも受け入れられる江戸発祥の文字デザインの魅力を探ります。



山崎屋源七提灯店8代目
山田記央さん

1719年創業、代々浅草寺、浅草神社御用である老舗提灯店の8代目店主。提灯の文字以外にも、勤亭流、寄席文字などを手がけ中国書法学院で文字を専門的に研究されている。台東区優秀技能者、東京都伝統工芸士に認定。

山崎屋源七提灯店

◆ 台東区雷門2-9-9

● 9:00-19:00／日・祝休

☎ 03-3841-8849

一筆では書けない！ 計算し尽くされた粋なデザイン

江戸文字とは、歌舞伎で使われる勤亭流や、落語の寄席文字、番付表などでおなじみの相撲文字などを総称するもの。江戸手描提灯にはそういった江戸文字のほかにも、提灯の使用用途に合わせ隷書や篆書、草書など様々な書体が用いられている。江戸手描提灯職人の山田さんは20以上の書体を書き分ける達人。山田さんに、江戸提灯に書かれる文字の特徴をお伺いすると、「提灯で使われる江戸文字の特徴は、遠くから見てもわかるように太く大きく、楷書をベースとして筆の入りと止めを強調した形です。集客を願って、視認性の高さで力強さが求められます」。

また、平面的な紙の上ではなく凹凸のある立体的な提灯の上に文字を書いていくため、書き方も特徴的。初め

に細い筆で文字の輪郭を取った後に、線の内側を塗り込んでいくことで太く黒々とした文字が出来上がる。籠字と呼ばれるこの輪郭をうまく描くことが、提灯の江戸文字の肝。筆の運びや勢いをイメージして一筆ごとの線の入り方まで丁寧に描き込んでいく。同じ文字であっても、提灯の形や全体の文字のバランスによって書き方は一通りではない。「文字といいながらもすごく図形的ですよ。探究心に終わりが残してくれた膨大なアイデアから現代の文字まで、見るべきものがたくさんありますし、お客様からのオーダーも様々。文字の背景を理解して伝統を守りながら、時代に合わせて変化し続けています」。



左上) 4Bや6Bの鉛筆であたりをつけた後(写真右)、面相筆を使って素描きをする(写真左)。この書き方のことを「籠で描く」という。
右上) 書き順は関係なく描きやすいところから描き、ムラやカスレがないように仕上げていく。「絵に近い感覚かもしれません」と山田さん。
左下) 素描きをするための細い面相筆から、塗り込む際に使う太い筆まで、様々な太さの筆を使って文字を描く。
右下) ヒゲ文字(左端)や勤亭流(左から2番目)など様々な江戸文字が書かれた提灯。バランスよく全体が収まるように計算された文字レイアウト。

COLUMN

庶民文化に 溶け込んだ文字

文・永原康史

江戸文字は、幕府が公的に用いた書風「御家流」が江戸の市井に伝搬したのち、それぞれの分野で独特に変化した、いまでいうコーポレートフォントのようなものだ。当時から江戸庶民は書体の表情を読み取っていたようで、式亭三馬の滑稽本『柳髪新話浮世床』には、長屋の入り口にかけられた看板の文字を面白おかしく描写したシーンがある。ヤブ医者

の看板はさじの先のようにゆがんだ様子の書体で、宋朝体は半人前の儒学者の表札、そして床屋の文字は「おかしなところにかすれをつけて達筆ぶった提灯屋の文字」とある。この時代、文字の専門家である提灯屋が看板を書くことが多く、挿絵を見ると江戸文字のひとつ「ヒゲ文字」のようだ。江戸庶民文化がいまに続いている。



図版：別添 式亭三馬『柳髪新話 浮世床』(1814年)より抜粋

大谷陽一郎の 漢字TOPIC

集合した先にある新たな風景 「漢字」に込められたエネルギーを解放する

大谷陽一郎／アーティスト



おおたに・よういちろう／2015年桑沢デザイン研究所卒業。17年に作品集『雨 大谷陽一郎作品集』(リトルモア)を出版。18年東京藝術大学大学院美術研究科デザイン専攻修士課程修了。現在、同大学院博士後期課程に在籍。18年から1年間、中国の清華大学へ交換留学。instagramアカウント(@yoichiro_otani)

漢字をモチーフとした作品を制作するアーティスト・大谷陽一郎さん(東京藝術大学大学院博士後期課程在籍)。上野桜木の旧平櫛田中邸を拠点とした芸術文化環境創造プロジェクト「DenchuLab. 2019」に選出され、新たな作品制作を試みました。「漢字」を見つめ直す大谷さんの新たな表現に注目します。

デジタルなコミュニケーションが主流である今日、漢字一つひとつの意味に立ち返るという機会はありません。だが、ひとたび立ち止まってみれば、古代の人々が感じた自然の風景やイメージを数千年の時を経て保存し続ける「漢字」の面白さに気がつく。そんな漢字の形に込められた意味や表現に着目し、新たな表現を試みる大谷さんの作品《計に景》は、2020年に旧平櫛田中邸で滞在制

作されたもの。アトリエ壁面を覆う本棚にかつて並んでいたという膨大な蔵書コレクションから抽出された漢字を素材として、アトリエ空間に森の風景を出展させた。一つひとつが異なる形である文字が集積されていくことで新たな景色に到達する。近くから、遠くから、漢字という文字を様々な角度、距離、深度で見つめたい。



大谷陽一郎《計に景》2020年

文 大谷陽一郎

平櫛田中はかなりの読書家だったそうで、かつてのアトリエ兼住居では至る所に本が積まれていたという。大量の本に囲まれながら、家族と暮らし、数々の彫刻作品を制作した田中。そんな田中の制作風景を想像しながら、私はアトリエ空間の壁面を覆う本棚に作品を展開し

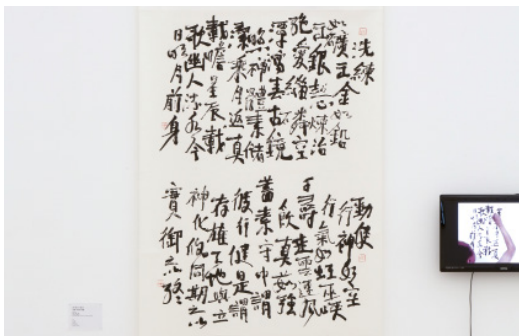
た。ドットのように配置した田中の膨大な蔵書から抽出した漢字は、この森を成す細胞だ。森のモチーフは、この建物の近辺の木々をもとに再構成したものである。かつての記憶を組み上げ、いまある風景を創出する。漢字を媒体として過去と現在をつなげることを試みた。



いのうえゆういち 井上有一 《愛》1972年 © UNAC TOKYO

戦後まもなく世界的に高く評価された、日本現代美術を代表する書家。一枚の紙にたっぷりの墨をふくませた大筆で全身を使って書く「一字書」や、接着剤や凍らせた墨といった素材の実験を重ねた作品など、現代書に大きな影響を与えている。

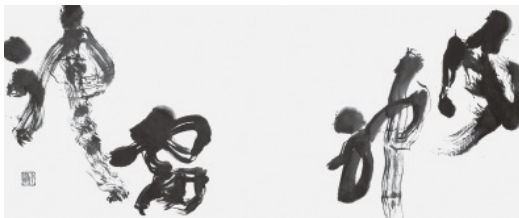
PROFILE 1916年東京市下谷区(現・台東区)生まれ。小中学校教諭として働きながら書の表現を追求。サンパウロ・ビエンナーレほか数々の美術展に出品、国際的に高い評価を得る。85年没。



チウジージェ 邱志杰 《逆さ書きの書道》(部分) 2018年 撮影：木奥恵三

中国現代美術を代表するアーティスト。2018-19年、活動の中心をなしてきた「書」の作品を集めた個展「邱志杰(チウ・ジージェ)書くことに生きる」を金沢21世紀美術館で開催。「書」を時間をベースにした芸術としてとらえ、時間性を映像で表現するなど、「書」の概念に踏み込んだ独自の作品を制作。

PROFILE 1969年中国・福建省生まれ。書、絵画、写真、映像、インスタレーション、パフォーマンスなど様々なメディアを融合させる手法で作品を制作するほか、キュレーション、執筆など幅広く活動。



かなざわしゅう 金澤翔子 《風神雷神》2006年

国内の名だたる神社仏閣での奉納揮毫や、多くの海外個展も成功させる。上野の森美術館で開催した個展にも出品された《風神雷神》は、京都・建仁寺で俵屋宗達の《風神雷神図》と並び展示される代表作。全身を使い太筆で書かれる大胆で力強い作品が魅力。台東区役所1階「台東アートギャラリー」では記念講演会で席上揮毫した《飛翔》を展示(P02参照)。

PROFILE 1985年東京都生まれ。5歳から母・泰子に師事し書を始める。NHK大河ドラマ『平清盛』ほか、国体の開会式や天皇の御製を揮毫。紺綬褒章受章、日本福祉大学客員准教授、文部科学省スペシャルサポート大使。



ししゅう 紫舟 《天晴れ日本》2020年

文字を平面上から解放させた彫刻など、「書」を書画から彫刻、メディア・アートへと昇華させ、2014年にはフランス国民美術協会展において、書画で金賞、彫刻で最高位金賞を日本人として初のダブル受賞。浮世絵を新しい概念で再構築した作品など、「書」をベースとしたアート表現を展開する。

PROFILE 代表作にNHK大河ドラマ『龍馬伝』や美術番組『美の壺』の題字、伊勢神宮「祝御遷宮」など。2013年より大阪芸術大学教授。

PICK UP 本誌の表紙作品を制作！



しんじょうだい ちろう 新城大地郎 《手》2020年 © Daichiro Shinjo

宮古島を拠点に国内外でパフォーマンス・制作を行うアーティスト。自身のルーツである沖縄の精神性や、禅の哲学に影響を受けた独自の表現を追求している。新聞紙の上に文字を書いたり沸騰した墨を使ったりするなど、身体性、空間性を伴う自由で軽やかな表現で、現代における新しい「書」に挑戦する。今号の表紙の書も手がける。

PROFILE 1992年沖縄・宮古島生まれ。主な展示に、PlaymountainTokyo、JINNAN HOUSEでの個展や、TRUNK HOTEL ロビーでのインスタレーション、UNTITLED ART FAIR 2020 (サンフランシスコ)など。

2021年デジタル全盛時代の フォントと手書き文字の関係性

インタビュー：永原康史(グラフィックデザイナー／多摩美術大学教授)



デジタルコミュニケーションが主流となる現代、これからの文字はどのように進化していくのでしょうか。グラフィックデザイナーとして様々なフォントや文字に精通する今号の監修者・永原康史さんに、フォントと手書き文字の関係性、これからの手書き文字の可能性などについてお話を伺いました。

ちょっとズレているからカワイイ

—— デザインの観点から見ると、最近はどうのような文字が人気なのでしょう。

長く続いている傾向として、少し古風な感じのするものや、手書き風のフォントが一般の人に好まれているという感覚があります。数年前に登場した「UDデジタル教科書体(モリサワ)」というフォントは、明朝体のような活字よりも、私たちが日常で書くような手書き文字に近くて、文章を読むのが苦手な人たちにも読みやすいと話題になりました。社会のニーズという意味でも、より手書きに近い文字が求められているような気がしています。

—— 手書き文字の魅力は、デザインのどのような点にあるのでしょうか。

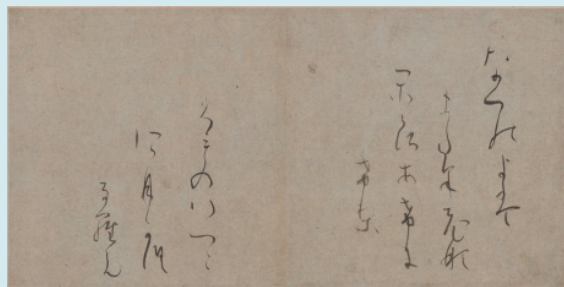
一文字一文字、違う形になるところでしょうか。例えば、中村不折の《龍眠帖》(P05参照)の文字をフォント化すると、途端につまらなくなってしまうと思うんですよね。文字ごとに線が震えていたり崩されていたり、そういうズレが魅力になっている。実家が書道塾を開いていたので子供の頃に書道をしていたのです

が、どうやってもお手本通りに書けない。でもだんだんと、1筆目を書き始める位置とか、角を曲げる位置が大きくずれなければ上手な文字に見えるということがわかってきました。逆を言えば、そのポイントをわざとずらしていくと面白い文字になっていく。ピタッとしているよりも、不揃いだったり失敗しているほうが、かわいく見えるのかもしれませんが。音楽でもミュージシャンがちょっとリズムをずらしてグルーブ感をつくったり、わざとフラットにして感情を加えたりしますよね。それと同じで、ジャストにしたりずらしたり自由度が大きいのが手書き文字の面白さですね。あとはライブ感。墨が文字を書き

すすめるうちにかすれてくるように、書いている時間が文字のなかに積もっている。これは、フォントには絶対に真似できない手書き文字の魅力です。

—— 永原さんの著書『日本語のデザイン』(美術出版社)にもありますが、日本語の文字としての魅力はどのようなところにあるのでしょうか。

文字は読んでもらうために書かれるものですから、昔の人たちは活字のように書きたかったんじゃないかなと思います。古代中国の漢字も、古代エジプト文字のヒエログリフも規律正しく並んでいます。でも日本の平安時代の書を見てみると、つづけ字の「連綿」や「散らし書き」のように、どう考えても読みや



連綿や散らし書きが見られる平安時代の《継色紙》(伝小野道風筆) 出典：ColBase(<https://colbase.nich.go.jp/>)

すさを意識したわけではない書体で書かれている。何かもっとほかのところに意識があるように感じます。空間も含めた非常に視覚的な表現が大事にされている。文字を使える人が少なかったというのも理由のひとつだと思うのですが、みんなが読みやすいことよりも、限られた読み手に向かって、文字そのものが持つ意味と、自分がそこに書く意味、両方を含めて文字を書いている。身振り、表情、声色とかそういうものに近いコミュニケーションツールとして手書き文字があったように感じます。いっぽうで現代の活字やパソコン上の文字は、どんな人にも読みやすくすることを目指しています。そういうと

ころから見ても、フォント文字と手書き文字はまったく違うものだと感じます。

手書き化する「フォント」、 フォント化する「手書き」

—— 近年、私たちが日常で目にする文字のほとんどがフォント文字であり、手で文字を書く機会も少なくなってきました。これからの時代の文字はどのように進化していくと思われますか。

昔の人には多かったですが、最近は文字を崩して書いたり、続けて書いたりする人って少ないですね。それは多分、スマホでもPCでも、ずっと活字化された文字を読んでいるからだと思います。そういう意味で、手書き文字とフォントは非常に強い影響関係にあります。「書」のような表現としての文字とは別の、日常で何気なく書く文字は、これからはますますフォントのような文字に近づいていくんだろうと思いますね。いっぽうで、最初に話した通り、近年、フォントをつくる人たちは、手書きの良さを残した文字をつ

くろうとしている。そういうふうにして、手書きはフォント化していった、フォントは手書き化していくということがあるかもしれませんね。時代とともに文字は変化していくものですから。

永原康史(ながはら・やすひと)

グラフィックデザイナー。多摩美術大学情報デザイン学科教授。電子メディアや展覧会のプロジェクトを手掛け、メディア横断的なデザインを推進している。『インフォグラフィックスの潮流』(誠文堂新光社)、『デザインの風景』(ピー・エヌ・エヌ)など著書多数。タイポグラフィの分野でも『日本語のデザイン』(美術出版社)など多くの著作を発表。オリジナルフォントに「フィンガー」(タイパンク)がある。

路上文字観察のプロ・藤本“ANI”健太郎さんが歩く！

台東タイポさんぽ

路上に息づく個性豊かな文字をグラフィックデザイナーの視点で観察した『タイポさんぽ』(誠文堂新光社)の著者・藤本“ANI”健太郎さんが、「タイポさんぽ」を台東区で実践！台東区を散歩しながら街にあふれる手書き文字を収集し、愛情たっぷりに解説していただきました。

散歩した人

藤本“ANI”健太郎さん
(グラフィックデザイナー)

1973年北海道生まれ。グラフィックデザイナー。街歩き中に会った面白い文字、味わい深い文字、または謎めいた文字などに対して妄想の翼を広げたタイポグラフィ・エッセイ『タイポさんぽ』(誠文堂新光社)シリーズ著者。



1 安藤鯉節店の隷書暖簾



すえひろレンガ通り東端に位置する安藤鯉節店さんの店先は、レンガ敷きの通りに溶け込むようなカラーリング。鯉節のイメージにもつながる薄茶色の暖簾には、力強い立派な隷書が染め抜かれていました。

4 金文字の生まれいづる所



商店建築のファサードを飾った金文字(多くは木製の半立体文字に金箔を貼ったもの)。いまでも看板などで残っていることが少なくないですが、その文字をつくっていた工房の金文字、というものは、初めて出会いました。上野金字看板店さんの軒先には、匠の技のサンプルのごとくに、ディテール満載のリッチな金文字が掲げられていました。

5 三浦屋さんの波しぶき感

浅草橋、屋形船の三浦屋さんの木彫看板文字は、大胆すぎる「三」の字が特徴的。まるで舟が蹴上げる波しぶきのような猛々しい表現です。キャラクター性満点の手仕事看板文字です。



※掲載図版について：本ページは公共空間における文字デザインの紹介を目的としており、著作権法46条(公開の美術の著作物等の利用)が規定する範囲の事物を対象としております。また、同様の理由から商標・ロゴの商標権そのものを侵害して利用するものではありません。

2 西郷醫院の金文字



佐竹商店街のすぐ西側、堂々たる看板建築に旧字体の金文字で「西郷醫院」の4文字が掲げられていました。美しいバランスの楷書です。何ヶ所か、折れた部分が補修された跡も見えます。とても大事にされているよう。

3 そば八さんのフリースタイル

浅草橋、そば八さんの装飾テント文字は、蕎麦屋さんの定番、変体仮名の「きそば」も味わい深いですが、主役の「そば八」のフリースタイルっぷりが大変楽しい仕上がり。力の抜き差し変幻自在、大小のバランスも不可思議で、ひょうきんな印象の文字です。



6 浅草演芸ホール「ナマ」の寄席文字



浅草演芸ホールの入口脇に、出演者の写真付きで貼り出された寄席文字。すべて手書きです。デジタルフォントをCDに例えるならば、こちらはまさにライブ演奏！研ぎ澄まされた名人芸で、空間を埋め尽くす右肩上がりの縁起もの文字が綴られます。文字好きならこれだけでも大興奮必至です。

7 クジラ級の迫力



芸人さんも足しげく通うという鯨料理のお店「捕鯨船」の軒先に掲げられた提灯。左右に広がった、極限まで太く書かれた「く」といい、書き始めを大胆にくねらせた「じ」といい、鯨のような巨大感のある文字です。

10 キュートすぎる勅額



こちらは寛永寺根本中堂の扁額。まるでソフトクリームのようなかわいらしい文字。類ずりしたくなるような魅力ですが、大きさも高さも半端ではありません。なんと書いてあるかさすがにわからず調べると、東山天皇御宸筆の「瑠璃殿」(右書き)でした。根本中堂の別名です。扁額でも天皇下賜のものは「勅額」と呼ばれます。

12 山海の幸

橋場の静かな通りで、和食屋さんのド凄い看板と出会いました。一瞬、字にすら見えないこのカタチは「山海」。山の幸、海の幸のふるさどを書いた、一幅の掛け軸のような美しい看板です。



13 書家・武田双雲さんの作品がある店

書家・武田双雲さんが結成したTEAM地球がプロデュースする浅草のおみそ汁専門店「MISOJYU」の店内では、双雲さんの書を堪能できます。

8

彫刻が語る熱きストーリー

彫刻家・朝倉文夫による《生誕》像は、1964年の東京オリンピックを機に上野公園入口前に設置されたもの。その後地下駐車場の整備に伴い撤去されましたが、令和の東京オリンピックに合わせて再び不忍池に臨む位置に復活したという、アツいバックストーリーを持つ作品です。「生誕」の題字はなんと台東区長の筆！



9

上野公園内・神社2社のジオメトリック隷書提灯



上野公園内にある2つの神社、五條天神社と花園稲荷神社の提灯は、隷書の骨格でありながら、直線的画線にこだわった「ジオメトリック隷書」とも言えそうな特徴的な字。伝統とモダンのバランス感が魅力的。

11

「わ」の成り立ち



谷中銀座から脇に入った通りで出会ったのがこちらの小さな木彫看板。古書画・弘和洞さんのもの。大胆な筆運びの「和」はほとんどひらがなの「わ」。ひらがなの成り立ちを思い出させてくれます。となりの「洞」の字のルックスもあいまって、全体からお茶目なキャラクター性を感じてしまう3文字です。

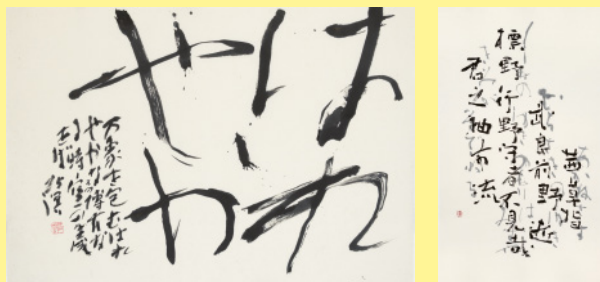


台東区のカルチャー・イベントレビュー

台東区で開催された、様々な文化イベントを振り返ります

軽やかに浮遊する現代書の世界

上野アーティストプロジェクト2020 「読み、味わう現代の書」



左) 中野北溟《はれやか》2020年
右) 岡美知子《額田王の歌(万葉集)》2020年

タイトルにもある通り、知識の有無にかかわらず、自由でのびやかな現代の書の世界を「読み、味わう」ことができる展覧会。現代の書道界を代表する大ベテラン書家5名の代表作から最新作まで、展示作品はすべて「釈文(作品の意味や読み方を解説したもの)」とともに鑑賞することができ、初心者にも心強い。だが、何よりもまず、ただ作品の前に立つだけで感じる書のパワーに圧倒される。文字が持つ意味を読み、理解するというを超えて、紙の上で濃淡様々な墨で表現される自由でのびやかな線の動きの面白さ。にじみ、かすれ、飛び散った墨跡や、時間が経ち乾燥した墨のテクスチャーに、書の持つ時間性も感じ取ることができた。

INFORMATION

■ 2020年11月18日～2021年1月7日
◆ 東京都美術館(台東区上野公園8-36) ● 当日券 一般 500円 / 65歳以上 300円
□ https://www.tobikan.jp/exhibition/2020_uenoartistproject.html

【連動企画】東京都美術館コレクション展「読み、味わう昭和の書」

■ 2020年11月18日～12月28日 ● 無料
□ https://www.tobikan.jp/exhibition/2020_collection.html

毎月18日は観世音菩薩の縁日といわれ、とくに年内最後の御縁日である12月18日は、「納めの観音」と呼ばれる。かつて新年の準備のため、正月の品や日用品が売られていた歳の市だったが、歌舞伎役者をモデルとした羽子板が人気を博し、羽子板を売る店が増えたことから、羽子板市と呼ばれるように。浅草寺で開かれる歳の市は、江戸最古といわれ、毎年、浅草寺境内には数十の露店が並ぶ。店内にぎっしりと飾られた大小色鮮やかな江戸押絵羽子板は圧巻だ。さらに押絵羽子板職人と東京藝術大学デザイン科の学生がコラボレーションした羽子板も展示、販売されており、伝統的なデザインとは打って違って、牡蠣をモチーフにしたものなど個性豊かな作品が並んだ。

INFORMATION

■ 2020年12月17日～12月19日
◆ 浅草寺(台東区浅草2-3-1)
● 無料
□ https://www.senso-ji.jp/annual_event/21.html

江戸最古の歳の市

納めの観音ご縁日・ 羽子板市 2020



左) 露店に並ぶ江戸押絵羽子板 右) 「東京藝術大学デザイン科と羽子板職人のコラボレーション展」ポストカード

たいとう文化発信プログラム

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会を契機として、台東区内の文化・芸術に関わる様々な取り組みをPRし、世界に誇れる歴史と文化を持つ区の魅力を国内外へ発信することを目的として策定されたプログラムです。このプログラムを通じて、観光客はもちろん、区内に住んでいる方や働いている方にも台東区の魅力を発信していきます。

ロゴマークデザインについて

台東の文字を変形させたロゴマーク。「多様な文化を和える(あえる)」というテーマで、様々な文化が混ざり合って形成された台東区を、異なる3つの形で表現しています。



台東区文化芸術総合サイト 「たいとう文化マルシェ」

台東区内の魅力あふれる文化イベント・文化施設・展覧会レポートなどを紹介する文化芸術総合サイト。あなたの文化イベントも登録可能。



www.culture.city.taito.lg.jp/ja

COVER ART

新城大地郎《手》2020年

今回、文字を表現する「手」に着目をして、作品の制作を依頼。現代の生活では目にすることが少なくなった墨と太い筆で書かれた文字からは、様々な要素を読み取ることができる。勢よく筆を動かすことで飛び散った点やかすれ、線から浮き出ている鮮やかな墨痕、何層にも重なった波のように見える線を目でなぞっていくと、そこから筆の動きが想起される。禅僧であり民俗学者でもある祖父を持ち、作家自身のバックグラウンドがつくり出す禅の繊細な精神性に、パワフルな身体性が交わることで、表面的にとどまらない、人の手によって書かれた文字の表現が十分に表れた今号にぴったりな作品となった。

『台東鳥瞰』とは

台東区が持つ魅力は、世界的な観光スポッポットやイベントにとどまらず、ひっそりと続く伝統や日常に息づく習慣など、じつに多様です。『台東鳥瞰』は、それらを鳥瞰し見直すことで新しい発見や気づきを提供する、年2回発行の文化芸術広報誌です。

発行日 — 2021年3月1日
発行 — 台東区文化産業観光部 文化振興課
監修 — 永原康史(多摩美術大学)
企画 — 田尾圭一郎(美術出版社)
編集 — 目黒真理ジュリ(美術出版社)、
裏谷文野
A D — 吉崎梢(美術出版社)
印刷 — 凸版印刷株式会社
協力 — 台東区立書道博物館